



しゅくふく Blessing



2015年4月 No. 98

〒565-0824 吹田市山田西3-55-7 TEL 06-6875-0031

<http://www.senriseisanitsu.info/>

我らが赦すごとく、我らを赦したまえ

天にまします我らの父よ。願わくは、御名を崇めさせたまえ。御国を来たさせたまえ。御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出し給え。国と力と栄とは、限りなく汝のものなればなり。

アーメン。(主の祈り)

シリアでイスラム過激派に殺されたと見られている後藤健二さんが2005年に書いた本『ダイヤモンドより平和がほしい』(汐文社)。長い内戦の末に「世界で最も平均寿命が短い国」となったアフリカのシエラレオネで、少年兵に右手と両耳を切り取られた男性が言いました。「もし、その子がおれの目の前にいたとしても、おれは彼を責めない。(中略)俺たちはこの国に平和がほしいんだ。何よりも平和なんだ。それがすべてさ。／彼らを許さなきゃいけない。でも、絶対に忘れることはできない。」かつて少年兵とされて多くの人を殺した少年が、脱走して保護され、立ち直るために学校に通っています。「この国から戦争を無くしたい」と語る彼は、もし報復のために自分の家族が殺されたとしても、その相手をゆるす、といいます。「なぜなら、まだ戦争は続いていて、だれの家族だって殺されるかもしれないんだ」と。

赦すためには勇気と意志の力が必要です。しかし、憎しみの連鎖を断つために勇気を持って赦す人が、どこかで必要なのです。イエス・キリストは祈りのことばを教えられました。「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」と。赦せない誰かを赦していく。真の平和はそこから始まります。

千里聖三一教会牧師 金井由嗣



讃美歌のおはなし

NHKの朝の連続ドラマ「マッサン」では、スコットランド人のエリーと日本人青年のマッサンを近づけた曲、そして日本にやってきたエリーと近隣の人々の間を親しく結びつけた曲として「蛍の光」が歌われていました。

日本では卒業式というとき必ずと言っていい程この曲が歌われ、涙してしまう程日本人の心に染み込んだ歌ですが、この曲はもとはスコットランドの有名な民謡「オールド・ラング・ザイン」で、遠く離れた友との再会を喜ぶ歌でした。「マッサン」では出征する一馬をこの「オールド・ラング・ザイン」で見送るシーンもありました。

日本の「蛍の光」の作詞をしたのは東京師範教員だった稲垣千（ちかい）です。明治15年に発行された「小学唱歌集」ですが、その編纂に貢献した米国人W. ルーサー・メーソンが稲垣に「オールド・ラング・ザイン」のメロディに歌詞をつけてくれるよう頼んで「蛍の光」が生まれたと言われています。実はそのメロディは、賛美歌として日本の教会で歌われているのです。やはり同じ明治15年、日本で最初の譜付き賛美歌集「讃美歌并楽譜」が発行され、その中に付されています。その

歌詞は、人生を信仰をもってしっかり強く生きる喜びを歌ったもので、内容が違ってもこんなにも曲のイメージが違うのかと驚かされません。

賛美歌には他にも「埴生の宿」「庭の千草」「グリーン・スリーブス」など、私たちがよく知っているメロディのものがあります。賛美歌として作られたものに違う歌詞を付けて歌われたもの、反対にすでにある曲が賛美歌として歌われるようになったものもあります。バッハやルターといった有名な人が作った賛美歌もあれば、当時は無名であった人が作った賛美歌もあります。時代を越え、人種を越え、国境を越えて賛美歌は歌われていますが、その信仰に裏打ちされた言葉は、時に私たちの人生を変えるくらいの力をもって迫ってきます。

心が疲れて弱ってしまった時も、明日への希望を起こさせてくれる賛美歌。この私も何度となく賛美歌を聞いて勇気をふるい起こされる経験をしました。一人で歌うのもいい。でも礼拝堂で神様を賛美する幸いは本当にすばらしい祝福の時でもあります。あなたもぜひ教会に来て、歌ってみませんか。

(K. S)

讃美歌 370番

わが主の力と	かちの日来たらば	み声のまにまに	みめぐみ豊けき	黄金のかむりも	この世の君らの	並ぶべきものは	見よ、その栄えの	さかえを授くる	わか目もふらずに	むらがり囲みて	見物のひとびと	天にゆくはせ場に	いのちの冠は	ちからの限りに	めさめよ、わが霊
歌いまつらん	そのほまれは	走るこの身	すくいぬしの	ひかりぞなき	花のかざり	またとあらじ	かがやけるを	主は呼びたもう	走りすすめ	われを眺む	雲のごとく	そなえらるる	わがためにぞ	いそぎ進め	こころ励み

これまでの人生で辛かったこと

S・T

私がこれまでに経験したことで一番辛かったのは、両親を亡くしたことでした。今から十四年前のことです。母を亡くし、その八ヶ月後に父も亡くなりました。当時、父は悪性リンパ腫で余命あと一年余りと告知されていました。住み慣れた土地を離れ、長男である兄が住む札幌へ行き、そこで入院生活を送っていました。母は腎不全で透析をしていましたが、父の残された時間を共に過ごすため、少し遅れて札幌に行きました。

慣れない兄一家との生活、新しい病院での透析、それでも母は、毎日、父の元へ見舞に行っていました。札幌へ行って一ヶ月。透析のシャントが詰まり、大出血をして救急車で病院へ運ばれ、手術をしました。手術は成功しましたが、その明け方に、亡くなってしまいました。心不全でした。早朝、電話知らせを受けた時は、母の死が信じられませんでした。

心を静めるために私が手にしたのは一冊の聖書でした。なぜそこに聖書があったのか・いまだにわかりませんが、とにかくやみくもにページをめくり、聖書を読みました。そこで目にしたのがマタイ十一章二十八節のみことです。「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」この聖書の言葉をきっかけに、私は小学校の頃通っていた教会へ再び通うようになりました。そして、母を失った悲しみも癒えないうまま、八ヶ月後、父も母の後を追うように亡くなりました。その間、私は教会の方々に多くの励ましと慰めの言葉をかけていただきました。礼拝では、賛美しながらよく泣いていましたが、帰る頃にはすっきりとした気持ちになり、気持ちを立て直すことができました。

神様は、聖書を通して、賛美を通して、またある時は祈りを通して、わたしに慰めと平安を与えてくださいました。その後、牧師との学びで十字架の贖いとイエス様の復活について知りました。最初は信じられませんでした。日々の生活の中で「イエス様は、今も私とともにいてくださる」ということを実感し、このことからイエス様の復活は真実であると信じ、キリスト教の信仰を持つようになりました。

私は両親共、最期を看取ることができなかったことを悔やみ、そのことが私の悲しみを長引かせ、罪悪感に苦しむ日々が続きました。何か罪滅ぼしのような気持ちで病院のホスピスでボランティアをさせていただきました。ホスピスで信仰を持ち、穏やかな表情で旅立たれる方々の中にある平安と希望は、神様からの祝福です。私は、このことを通して魂の癒しということを信じるようになりました。そして今、祈りの中で導きが与えられ、グリーンケアを学ぶ機会が与えられました。今関わっている仕事とも関連があり、この学びに期待しています。何も備わっていない者ですから苦勞も多くあると思いますが、そのような者に目を留め哀れんでくださる神様に信頼して、一歩一歩歩んでいきたいと思っています。

主は私の羊飼い。私には足りないことがあります。

主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

たとい、死の陰に谷を歩くことあつても、私はわざわいをおそれません。

あなたが私とともにおられますから。
(詩篇二十三篇)